



タイ・バンコクの高架鉄道BTSプロンボン駅下に、日本居酒屋「さんや」がある。タイ東北部(イサーン)ノンブアランプー県出身のオーナーの名前が店名である。オーナーが日本人板前の下で厳しい修業をしたこともあり、日本が懐かしく思える庶民的なメニューが多い。日本からの出張者が減っている中、オーナーがタイ人なこともあり、最近ではタイ人のお客さんも増えている。

「さんや」で際立つのは、気軽に日本語で声を掛けてくれる4人の女性スタッフの明るさ。たまにお勧めメニューを強引に売り込んでくることもあるが、「さんや」の味とスタッフの応対が気に入って、私もひいきにしている。

タイのレストラン苦境

タイに新型コロナウイルスの感染拡大「第3波」が到来し、時短営業、アルコール提供禁止とされ、飲食店は、5月1日からは店内飲食も禁止となり、持ち帰りの弁当を提供するだけとなった。そうした中、女性スタッフのミアウさんから「仕事を辞めて田舎に帰る」と言われた。店の売り上げも減少し、やむを得ない事情があるのだろう。

ミアウさんは5年前に家族と別れ、オーナーのサンヤさんと同郷という縁もあり店で働き始めた。以来、バンコクでの出稼ぎ生活を続けている。日本語はオーナーやお客さんとの会話で勉強し、今では日本語でメニューを書けるようになった。田舎に残してきた長男は16歳で、祖父母が面倒をみてい

従業員20万人超 失業か

る。田舎に帰り、家族で暮らせることは幸せかもしれない。一方で、職を失い今後の生活に不安が付きまとう。「田舎に帰っても何も当



店を辞めて、田舎に帰るミアウさん
タイ・バンコク

てがない」とミアウさんは言う。タイ・レストラン協会のラッタ会長は、1日からの規制強化により、一部の顧客が行動を変えているとした上で、「自宅で調理する人が増えたことでレストランへの注文は減少している」と指摘。「短期、長期の両面で20万人以上のレストラン従業員が失業するだろう」と述べる。

タイ政府は、生活困窮者に対しても生活支援の追加策を打ち出しているが、労働の機会がなくなることが一番の課題だ。3月1日からワクチン接種が始まったが、変異株と言われるウイルスは脅威である。

通い慣れた「さんや」で、私が指定席としていたカウンターの席に再び座れること、ミアウさんが再びこの店で働けるようになることを切に願いたい。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)